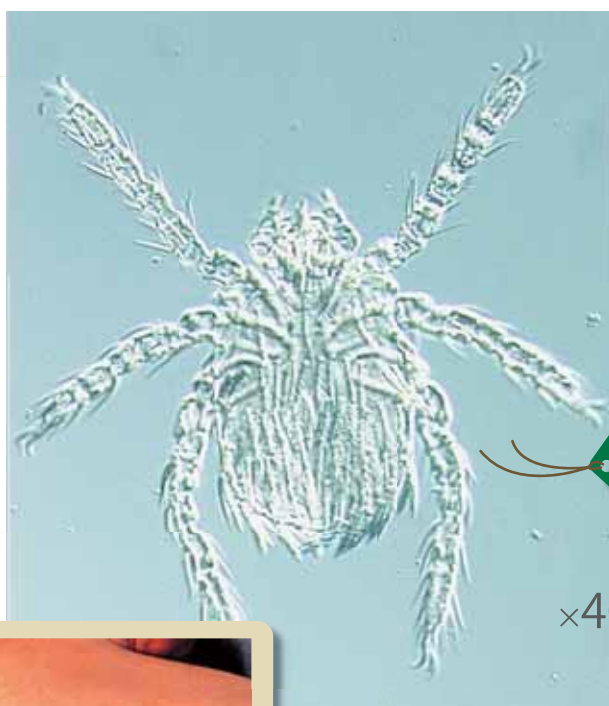


つつが虫病

早期発見・早期治療が大切!



ツツガムシの幼虫(平成18年11月 大江町採取)
微分干渉顕微鏡写真 撮影:山形県衛生研究所

×400倍



患者の発疹
発病して6日目

写真:もんま内科皮膚科医院
門間節子医師提供



ツツガムシ幼虫の刺し口
発病して6日目

山形県衛生研究所

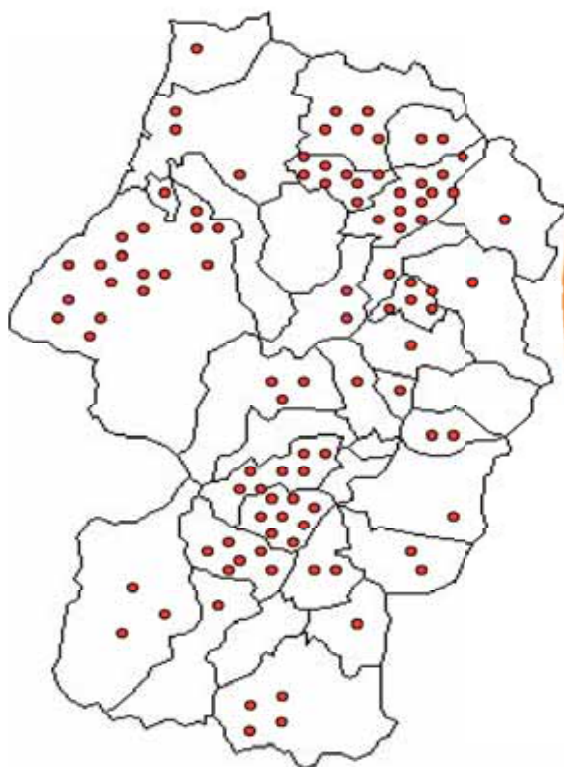
つつが虫病とは？

つつが虫病はツツガムシ（ダニの一種）の幼虫に刺されて、高熱や発疹などの症状がでる病気です。

日本のつつが虫病は、古くは雄物川（秋田）、最上川（山形）、信濃川、阿賀野川（新潟）流域に、夏の間発生する、致死率の高い風土病として恐れられていました。1965年頃から患者の発生はほとんどみられなくなりましたが、1976年から再び増えはじめ、北海道と沖縄を除く日本全域で発生がみられるようになってきました。

ツツガムシに刺されると、必ずつつが虫病になるわけではありません。本県では、主にフトゲツツガムシという種類がつつが虫病を媒介していることがわかりました。フトゲツツガムシにも病原体を持っているものと、持っていないものがあり、たまたま病原体を持った幼虫に刺されるとつつが虫病になります。病原体を持っていない幼虫に刺されても、発病することはありません。また、ヒト（患者）からヒトへうつることはありません。

ツツガムシは、卵—幼虫—若虫—成虫の生活環を持っています。若虫と成虫は土中で他の小さな虫の卵などを餌としていますが、幼虫は地表で野ネズミなどの動物に吸着し、体液を吸い、満腹すると動物から離れて若虫になります。まだ体液を吸っていない幼虫がヒトを刺します。幼虫の体長は0.2～0.5mm程度（表紙写真参照）のものです。



山形県では1980年、14年ぶりに患者が発見されて以来、毎年発生し、県内全域で患者発生がみられています（図1）。その約90%は春・初夏（4～6月）に発生しています（図2）。フトゲツツガムシの幼虫は春と秋に活動するので、この時期に患者が発生します。東北の秋は、寒さが早く訪れるためツツガムシ幼虫の多くが、ヒトや動物に寄生することができないまま越冬して、春の訪れとともに再び活動をはじめるので、春に患者が多くなると考えられます。

図1 患者発生地域 平成7年～17年

つつが虫病の症状★

発熱 (38～40℃以上の高熱)、**発疹**、**ダニの刺し口**、の3つが主な特徴です。

1. つつが虫病の病原体を持ったツツガムシ幼虫に刺されて5～14日頃に**38～40℃の高熱**が始まり、全身倦怠、悪寒（寒気）、頭痛、咽頭痛、関節痛、食欲不振などの“風邪様症状”が伴います。
2. 熱が出てから2～5日頃にほぼ全身にわたって粟粒大から小豆大の**赤い発疹**が現れ（表紙写真左）、ツツガムシの幼虫に刺された部位（刺し口）の近くのリンパ節が腫れてきます。
3. **刺し口**は、はじめ紅色丘疹から水疱、続いて膿疱となり、発熱して6日頃は中央部が黒色痂皮（カサブタ）状で周囲が発赤した状態になっています。（表紙写真右）全身をくまなく探すと刺し口が見つかります。（図3参照）

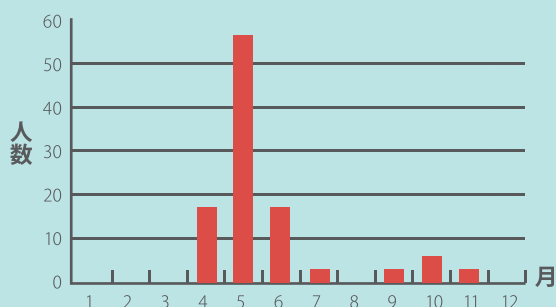


図2 月別患者発生状況 平成7年～17年

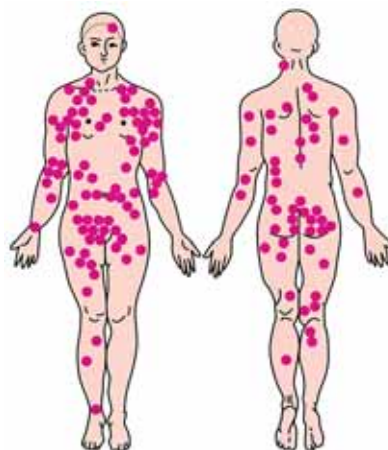


図3 刺し口の部位 平成7年～17年

つつが虫病の診断と治療+

つつが虫病患者は、ペニシリン系やセフェム系薬剤無効の高熱、発疹、リンパ節腫脹などの症状や肝機能異常、CRP強陽性、白血球、血小板異常などが伴います。つつが虫病は適切な治療がなされないと心不全、腎臓障害、肝臓障害、肺水腫、肺炎、脳炎などの重篤な症状が現れ、死に到る場合があります。

しかし、テトラサイクリン系などの抗生物質が極めて有効で、（ペニシリン系やセフェム系は無効）早期に治療すれば完全に治りますので必要以上に恐れることはありません。投薬後2～3日で熱が下がり回復に向かいます。早期発見・早期治療を心がけることが大切です。

つつが虫病の病原診断として血液中の抗体検査（IgG、IgM）と、血液中の病原体遺伝子検査（PCR法）を行っています。

つつが虫の予防

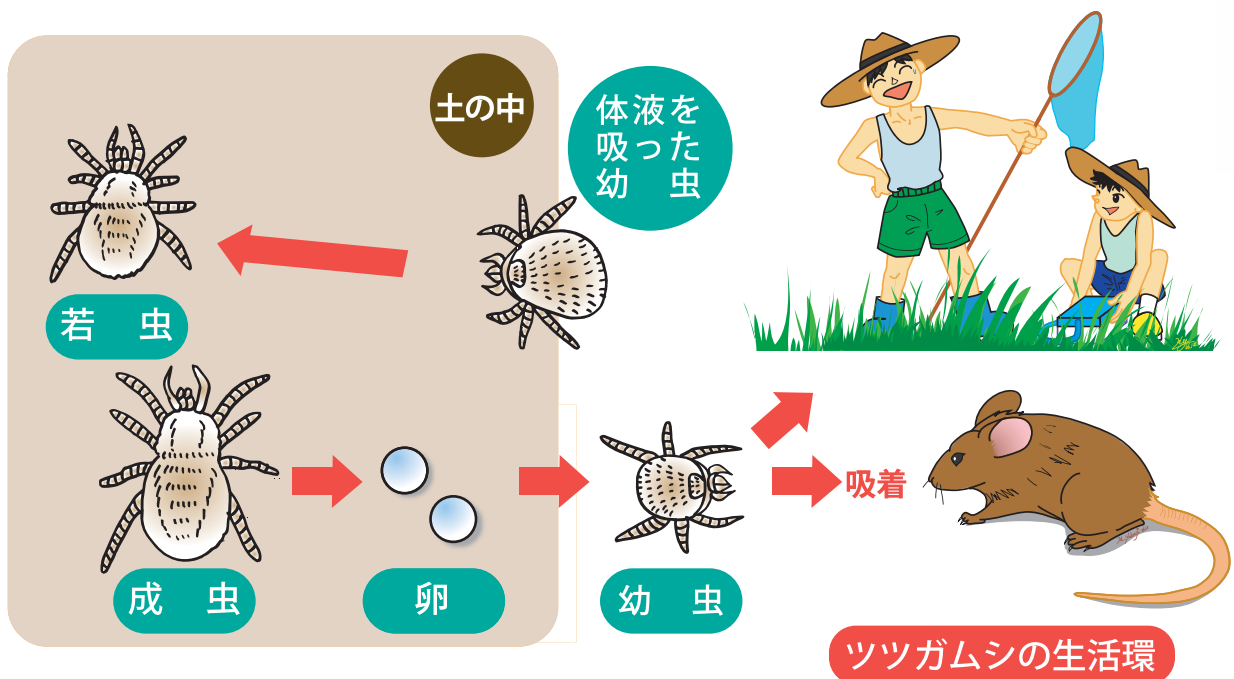
ツツガムシは、田畑、山林、やぶ、河川敷、草原などに生息しています。農作業、山菜取り、ハイキングなどでこのような場所に立ち入るときには次のような自衛手段がある程度効果的です。

1. 長袖、長ズボン、長靴、手袋等を着用し、素肌をできるだけ露出しない。
2. 休息するときはなるべく裸地を選び、草むらに直接座らない。
3. ダニ忌避剤、防虫剤を衣服に散布する。
4. 立ち入ったあとは入浴し、吸着したダニを洗い流す。

もっとも大切なことは、春～秋にツツガムシの生息していそうな場所に立ち入ってから5～14日後に発熱した時には、**まず、つつが虫病を疑うことです。**

そして、**すぐに医療機関を受診し、適切な治療を受けましょう。**

早期発見・早期治療を忘れずに！



医療機関の方へ（血清抗体検査、病原体遺伝子検査の依頼・相談は下記に連絡ください。）

〒990-0031 山形市十日町一丁目6-6
山形県衛生研究所 微生物部
TEL 023-627-1109